

水

鷄

笛



著者近影

宿の下駄
ぬらして

小蟹
捕らえて来





二

持人

中
山
七
里

心
す
車
急
じ



謹んで

路郎先生に捧ぐ

序

西尾栞さんは、麻生路郎を講師とする、阪大川柳講座の出身である。この講座は、当時の大阪帝国大学医学部の名誉教授の故長崎仙太郎博士（柳号、柳秀）の肝煎りで昭和六年七月に呱呱の声をあげ、戦時中の『川柳雑誌』奉還号まで続いていた。

聴講生の殆んどは大阪帝国大学病院の博士さん達であつた。医学部経理係であつた、栞さんは月一回のこの講座を作句研究の道場として、リラクゼーションのひとつを楽しんでいられた。本名は巖、雅号は栞、十七八の娘さんが出て来そうな可愛らしい名であるが、ご本人はなかなか堂々とした体躯の持主で、ポリュームのあるその声は、広い会場での司会者に適している。よく通る声に目星をつけた私は、自分の選の披講をしばしばお頼みしたこと

を覚えてゐる。

榮さんは常に柔和で、人づきあいもよく、ついぞ不機嫌な顔を見せたことのない人である。阪大の職を辞されてから、間もなく召集をうけ、満洲の野に三冬を越されて、運よく終戦を内地で迎えられ、昭和二十二年に八尾に製粉工場を創設して三転遂に菓子製造のメーカーとして、大阪商人の腕を発揮されるようになったのも、彼の性格が自然に運んでいつた当然のなりゆきであると思う。

或日路郎と私が、彼の家を訪ねる用事が出来た。初めて会った奥さんがまことに気のおけない、にこやかな、肩の凝らない人であることがわかった。夫婦というものは、片一方が喋りだしたら、片一方が無口であるとか、たがい逆の性質や、性癖によつて結ばれたコンビであると聞いているが、お二人は似たもの夫婦とお見受けした。こうした二人の融和の仲で、育かれた榮さんの句に暗さがある筈がない。常に健康で、明朗そのものである。事

業が軌道に乗るまでは、幾多の苦勞もあつたことと思うが、栞さんの句には、そうした深刻な面が見られない。彼の眼はいつもあかるい日向に注がれていて、特に女性の心理をキヤツチした句が多く、怒りも、悲しみも彼には全く縁遠い感情であるかのようにある。

幸福はその人の心にとハツキリ言い切りたい心境を彼は持つている。其のかげには、いつもにこやかに融和してこられた奥様のあることを忘れてはならない。この似合いの鴛鴦夫婦に未来永劫に幸福よ、続けかしとひたすらに祈つて筆を擱く。

昭和四十五年新春

生駒山麓にて

麻 生 葎 乃

序

西尾菜さんが句集を出すことになった。

麻生路郎先生指導になる阪大川柳会の発足当時からメンバーで長崎柳秀、笠原路生、尾崎方正、井上湧三、北川春巢といったベテランの中ではぐくまれたという柳歴は現在の菜さんの存在を充分に裏書きするものと言うべく、路郎先生との師弟関係から云えば私なんかよりは、ずつとずつと先輩でもある。

家庭でよきパパ、よき夫である彼は製菓会社の社長としての劇務の外に社会的公職も二三にとどまらぬ繁忙極まる生活の中から、川柳に対する熱情というか、もしかしたら川柳にとりつかれたとでもいうか、川雑時代から川柳塔へかけての作句年輪は極めて厚い。今日までの句数から云えば、おそらく

公式に発表されたものだけでも大した量になるのであろうが、そのおびただしい中から五〇〇の珠玉を厳選したのがこの句集であるから尊い。又この句集が世に所謂足跡回顧的な集録とは絶対に趣きを異にするものであつて後進の指導に裨益するというだけの面から言つても、世紀の名句集であると同時に路郎先生の「旅人」につぐものであると申しても決して過言ではないと確信するものである。そしてこの点は読む人々に充分納得して頂けるところである事も明らかである。

栞さんはいつも、私の句には特徴がない。言いかえると個性の色調がうすいとよく言う。勿論彼の謙讓さが多分に含まれていての言い分であるが私はそういう目で彼の句を受けとつてはいない。彼の句には彼の言う通り豆秋調とか、鮎美ばりとかいつた厳しく打ち出された栞調という句風は或は薄いかも知れない。しかし、たとえばこの句集を読んでもみると判るとおりに全巻に流れる栞の味、アブサンやワインの香りがいつもよりそうているフランス料

理に接した時のような高雅さと艶麗さを感じるのである。暗いところや陰鬱なところが少しもない。どちらかと言えば穿ちに徹した明るい軽い生活句が多いせいであると思う。そしてこのことはとりもなおさず彼の性格が、そのものずばりに現われているという事にもなるのである。頭の回転のよさ、記憶力の強靱且精確さには全く驚嘆の外はないのであるが、この事はひと一倍情熱漢である彼にとつては将に鬼に金棒という、川柳人としての条件は万点と言ふべきである。好漢一層自重自愛、もつて柳界の向上充実に力を致し精進を続けられんことを冀いささか蕪辞を草して句集発刊の祝詞に代える。

昭和四十五年春分の日

川柳塔社編集室にて

中 島 生 々 庵

恩

師

右手に煙草

左手に盃

頭に川柳

妻や待たん靴音を高めむか

というフェミニスト

俺に似よ俺に似るなと子をおもひ

という良きパパ

人類は悲しからずや ~~左~~ 左派と ~~右~~ 右派

という日本のバーナードショー

善きかな我が師我が恩師

謹

悼

柳聖の立膝でよし雲の峯

悼

友

二人の良き柳友の追悼文
を載せて謹んで冥福を
祈る

噫々吞友文蝶君

文蝶君と僕との行動は、弥次さん、喜多さんの仲だったから、残った栞は誠に、せつなく、淋しい。

句会のあとは十二時迄三時間あつた。常任理事会のあとは二時間あつた。殆んど必らずといつてよい、この二時間、三時間を有効適切に呑み廻つた。

むしろ二人は、柳友というより、吞友であつたかもしれない。

ちびりちびりやりながらの彼一流のしゃべくりが、又愉快だつた。

口ぶりは今にも落ちる仲居さん

よくこの句を吐いて、例の受け口の頤をつき出して、独り合点にうなづいていた。この句をきいて、黙つてニタニタしている俺ではない。Hな話になると、人後に落ちない。

酒のまわりはよし、話は面白い。『ホイ来た』と、もう一軒ということになるのも是非もなかつた。

スタンド『大町』を出ると、バー『姉妹』が待つていた。てつちり『すし半』をすむと、料亭『松本』であつた。彼はここというて、きめた呑み屋はなかつた。バーへは行つたが、キャバレーや、アルサロへは行かなかつた。若いホステスより仲居さんむきだつた。

彼は又何でもよく知つていた。出てくる料理の一品、一品についても、何だかんだと、説明をして、例のしやべくりの種にした。

又文蝶の『それわね』という言葉は有名だつた。常任理事会で問題が出ると、『それわね』という前置詞でもつて一家言を吐いた。

それが、どんなことでもよく知つていて、ホホーと感心したものだ。所謂物識りだつた。遠慮気兼ねのない男で、ツケツケと誰にでも、言いたいことをよく言つた。

路郎先生にも、前理事長の生々庵氏にでも、ヒヤヒヤするようなことを平気で言つた。街気もなければ、照れ気もなく、コンプレックスもしなければ蔑視もしない。実に開けつ放しの全く良い男だつた。だから彼の毒舌にも、誰も怒らなかつた。寧ろ親愛感すらもつて、所謂憎めない男というのが、定評だつた。

先般政界の名物男、大野伴睦老が死んで、紳士面許りの政界になつたと、新聞は書いていた。今柳界の名物男、文蝶君なきあとの、あたらずさわらずの柳界が誠に淋しいことである。

宵宮の太鼓が鐘と合う哀れ

因みに文蝶君の葬儀の日は天神祭の宵宮の七月二十四日であつた。

合 掌

一流の朋友梅里君

『人生朝露の如し』という言葉は、漢学者の誇張語だと許り思っていたが、今度の出来事で、その語が誇張でないことを知ったが、余りにも余りにも、儚ない人の命に、何だか生きてゆくのが嫌になつてしまった。夢のような出来事の為に、まだ実感が、ともなわない。例会や理事会に行けば、まだまだ会えるような気がしてならない。何かの会に行つて愈々会えないことがわかると、淋しいて淋しいてたまらないだろう。

梅里君のなくなられた様子をきいたが、御遺族の方々には誠に本意ないことだけでも、最高の御昇天だつたと思う。矢張り御信仰の賜だつた。御信心も一流だつたわけだ。

事業の方も発展の一途を辿つて、今度千里ニュータウンに大きな食堂を

経営された。事業の方も亦一流だった。川柳の方は御承知の通りだ、川柳塔副理事長、大万川柳会と人の及ばぬ世話もした。川柳も亦一流だった。

文字も大層上手だった、速かった、筆を持たせば矢張り一流だった。ジヨークも上手かった、彼独特の毒舌も面白かった、そして決して人をおこらさない毒舌だった、之も亦一流だった。唄も大変うまかった、鐘を三つならしたそうだ、良い咽喉だった、之も亦自他共に許す一流だった。そうそう誠実と親切はこの上なしの人だった、人の世話や仲人も沢山した、人間関係も亦全く一流だった。信仰、事業、趣味、親切、何も彼も一流だった。慾は言わないから、せめてもう十年生きておられたらと思うと残念で残念で堪まらない。然し乍ら自分も年齢の故で、時々死と言うものを考えている、その時に梅里君のような、昇天を切に切に望んでいるものだ。考えようによつては、梅里君の昇天も亦一流だったと思う。

最高の昇天ながらさりながら
誠実は信仰の姿のままに逝きたまひ

合
掌

目 次

紅灯の夕べ	晩酌	旅枕	或る日	ギヴァンドテイク	家族風呂	河内の灯	父、母	悼友	恩師	序	序
.....										中島生々庵主幹.....	麻生葭乃先生.....
129	119	95	63	55	43	35	52	13	9	6	3

あとかき	265
跋	261
水鶏庵	251
一男三女	239
北の護り	225
カステラと花束	217
恋	205
女ごころ	187
男ごころ	177
横町の雑音	161
四季	139

水 く
ひ

鶏 な

苗 ふ
え

父

•

母

初めて「父」という題で作った句

頭ほど光らぬ父でありにけり

岳父昭和三十一年八月二十七日歿

時計のような生涯とちた七十一

真面目さは かんてき村長とも言われ

臨終は手塩にかけた掌を握り

患いは七日諦らめられぬをあきらめる

敵父昭和十七年一月四日歿

戦捷の春の臨終安かりき

マニラ陥落きいて享年六十九

十八人の孫に寝棺はとりまかれ

物不自由一つの口を今日減らす

ソファ―に刀自という名のかさひくし

矢倉寿司だつせと遠い耳へきかし

親子二代のへんくつに母は老い

張り替えた障子の中に母います

阿呆になつときなはれという母があり

見送りの母ポケットへ無理に入れ

うす糊がきいてる母の小さい足袋

木の芽あえ母すこやかに八十九

昭和四十一年十月十四日歿

手提袋持たす寝棺に又哭きぬ

鯨幕の上に万朶の秋桜

母逝きて七日の鐘の冷えて来る

覚悟とは別に七日七日の寂しさよ

河
内
の
灯

習いたての手品は妻にしてみせる

アベックに違いはないが五十八

ゴツゴツと言うて言われて共白髪

添寝して父の無情を唄にする

夫婦読本ねまきは派手にせよという

ネクタイをしめしめ喧嘩のつづきする

おつうじのあつた話題も老夫婦

老妻に手を貸す梅の径でよし

夫婦は二世おたやんなれど辛抱する

時雨よし河内のはての灯を守る

紅葉寺明治の夫婦手をつなぎ

燃えもせずさめもやらずに珊瑚婚

夫婦喧嘩長男にフフンと笑われる

迎え傘の妻に教える水溜り

悟れる如く諦める如く老夫婦

家
族
風
呂

トマトからして嫁と気が合わず

遠い耳へきかす根氣を嫁はもち

姑のたまに笑えばサタンめき

皿割つた音を奥さん寝間できき

意見する儂がまだまだ遊びたし

効きすぎたかと両親の瞳が出合い

姑は半分きこえる耳をもち

掃苔の一人は義理の仲の人

ブラモデルませた言葉で手伝わし

孫が来て碁石がたりぬ駒がない

苔はやす石を孫等のすべりんこ

巻ずしの中だけ食べる祖母育ち

水引きに鰻あてている十二月

おむつまで提げたと姑眉をよせ

染め直し昔の生地をほめられる

ゆきとどいた言葉で姑おくり出し

鼻がようきいて姑の因果なり

五人目の孫抱く力余りけり

孫が来て儂のペースをくずすなり

孫達のとりあう膝をひろく組む

おんなじ話きくも孝行の一つなり

アルバムのここから軍服姿増え

結局は我が家をほめて帯を解き

せやさかいにとゆるう叱られる

宿題へ時々夜なべ口をきき

みんな帰してホンにおなかすきました

それぞれにスポンサーがあり孫達者

俺は独酌妻は家計簿差し向い

ギ
ヴ
ア
ン
ド
テ
イ
ク

べんちやらを言い言い判取してしまい

先先先月の判取をくるあわてよう

息子はんが来たという判取みせられる

判取をしいしい容態きいてくれ

セールスは譬え話をたんともち

どへんくつな親父やと集金戻つて来

得意先のボンボン抱いて泣かれたり

交渉はギブアンドテイクの肚でいる

操短の工場の上の揚雲雀

商売の方もコレストロールたまり出し

倒産へ非力な親類ばかりより

開店の算盤一桁あわてたり

ひがんできけば機械の音も借金借金

或時は祈る心で受話器持ち

菜の花の中の工場は閉めてあり

或
る
日

ピンセツトやつとつまんだ口になり

飛び乗りの今度は切符さがし出し

鯉節水晶の型にかかれたり

山部赤人立膝をして歌が出来

タイピスト部屋の隅から打ち出しぬ

踏切まできて鶏引き返し

一筆の富士は漢詩でうめ合わせ

御先祖は選挙が嫌い大嫌い

音痴今日詩吟を習うことにする

仮縫いのお世辞前から後から

かしわやの積んだ籠から刻をつけ

カレーライスばかりで今日の画家となり

どつちが生意氣だと窓口言い返し

誰にきいても知らん知らんという鋏

おまえ使っていたんかという鋏

雨洩りの型ピカソともマチスとも

名曲のすんだ拍手へ目をさまし

中風を見送ればという遺産あり

挨拶のものをもらつた声となり

家出の娘に叱らん説と叱る説

公園のここらを通る猟奇癖

銀行の昼　合札の落ちた音

倉の鍵旧家という音で開き

表具負けになると表具師思えども

叱らん先に出前のすんまへんすんまへん

案内はここで笑わすせりふあり

お向いと話してお隣りに妬かれ

御近所が舌打ちをする家が建ち

水煙あげて神輿は洗うもの

札束を肌の温みのままで出し

首洗池蛙觀海流で逃げ

海^め布^えを煮く家風は暗い台所

目印の神社を斜に拝んで来

行幸のさてもさてもの変りよう

皇太子さんでもとントン拍子なり

閑静な貸し間窓から墓がみえ

昭和三十七年十二月五日工場全焼

焼け跡で星を見上げている広さ

スタミナがどうのこうのと普茶料理

スペアーというのは二号のことなりき

せせこましいところで旨めいもの食わし

琥珀色の湯呑の主は生字引

まばたきもせず埴輪の笑みつづけ

敬老敬老とタクシーへ押しこまれ

しんみりとさせて持味ある高座

ポスターはここから撮った朱の華表

カメラアイ蜻蛉の目玉蝶の髭

天ぷら屋この腕という長い箸

知らん顔してるのに肩たたかれる

スラスラと特許番号香具師は言い

送られるよりましやと珠数を渡される

ラツシユ嬉しまさに唇ふれんとす

茶と苳苳とお茶で萎びてる

成ヒヨコがちりよつてくる気の悪さ

問題を残して去つた二階借り

靴ベラは手品のように仕舞われる

首巻をとる真似だけの家主なり

吸物の冷えたを板場くやしがり

船頭の小便に渡舟待たされる

そんな絵かきとは宿屋露知らず

干竿の落っこちた鶏のあわてよう

家族主義という怖い二階借る

本心を世間話のように云い

ターミナル再会という名の喫茶店

灯取虫客も扇子でうちそこね

展望台陛下も同じ方を指し給い

うりざね顔質素な家に生れて来

横町のその横町の握りずし

骸骨の講義骸骨横をむき

帰郷してやたら名刺をくれたがり

カメラもう人間撮すことに飽き

長寿村とも聾村とも言われ

雀の涙ほどとは貰う方

室二間ぶちぬく今日の金屏風

差し押さえの金庫の上の鏡餅

一人漕ぐボートはやけに速いなり

飽き性を叱るに写真機にもふれ

役者の子芸者の中でませている

雨傘の雫をきれば時代めき

測候所今日は尻がくるなと思い

大体どこで落したとは無理な訊ねよう

悪趣味と言われながらのコレクション

君づけで社長を訪えば秘書あわて

郊外のここ目印となるポスト

押しと金さと先輩こともなげ

木薬屋きざみながらの水加減

お通夜にごめんごめんと簞笥あけ

バツクさす笛を環視の中でふき

地獄の方がバラエティにとむという話

旅

枕

旅や旅情緒というを見のがさず

人恋し人煩わし波の音

イメージの踊り子もみず伊豆の秋

桑の葉をたたいてバスの行き違い

盃に島の唄ありひとり旅

宿の下駄ぬらして小蟹捕えて来

蟹の身をせせつて故郷の雪話

望遠鏡島の煙でもめている

河鹿きく妻も同んなじ宿浴衣

白樺の道 団体でゆくあほらしさ

絵葉書は水量のあつた頃の滝

滝を背に逆光線も巳むを得ず

スーツケース僕が持つうちが持つ

茶碗一つ置いて清水きよみず店となり

展望台落人部落夕餉らし

夫婦滝親子滝とてバススリル

河童橋写真を撮す順があり

奉仕料だけの奉仕という旅愁

大阪弁で信濃の空の碧さほめ

日本ライン盃洗にして酌み交わし

団参の探し合うたる声となり

一歩出ずれば吾れ旅人となる心

旅や憂しおばはん団体と乗り合わせ

プラットに佇った姿も旅のもの

船酔いへ港の見えたことを云い

訪
台

日本語で見送られ台湾語で迎えられ

燕翔ぶ港の街の旅靴

観光ずれを口々唧つ宿浴衣

逝く春を句便りにして独り旅

釣人も景色となつた雨の瀬

筏乗り絶景のところが忙しい

名園の借景となる東山

旅枕雨にしあれば雨の詩

一列車おくれるプラン
独り旅

山菜をつけた流れのかくれ里

これはこれ美人の里という清水

土肥温泉

明日乗る汽船をみている宿の窓

香具山を指さす先を蝶が舞い

草の名でもめて吟行面白し

籐椅子のおく位置があり海が見え

団参の赤いリボンも春のもの

壺焼へ指さす島の春霞

城趾から指さす馬場の花吹雪

三階の宿の手欄に富士が晴れ

一匹の蠅と夜汽車の旅にあり

一、二、 駅過ぎて落ちつく旅心

二人降り一人乗った雪の駅

バスツアーガイドは唄い客ねむり

大仏さん今日はズーズー辯で見上げられ

温泉や座り羅漢に寝る羅漢

新婚旅行にて

城崎の雪を相合傘で出る

溢れ出る温泉へ母 南無阿弥陀 南無阿弥陀

電灯の暗さ温泉効きそうな

湯の街のシンボルという橋一つ

山の湯の夜風をほめる窓をあけ

白骨温泉

上求菩提下化衆生ここだ虫の声

介山碑の上音なしの秋の雲

白骨の湯の香湯の色夢うつ

宿浴衣橋で会いバーで遇い

湯の宿の三階建は溪に沿い

孝行のしおさめという温泉ゆにつかり

湯の宿の廊下スリツパ二つずつ二つずつ

露天風呂一葉浮かべているぬるさ

湯の宿の湯番入墨して無口

一年をこつこつ貯めて温泉につかり

晚

酌

二次会で土産の鹿の角がとれ

お互いに中毒ですなと酌ぎこぼし

劣性遺伝と彼もみとめたはしご酒

酒仙とも言われ中毒とも言われ

おごられる方がトコ姐さん酒もつてこい

酒の勢いで墨痕淋漓たり

晩酌の一杯だけは妻が酌ぎ

馬あいというは一杯いける仲

豆もろこ三日つづいた猪口を置き

会葬の帰り死んだらあかん酒を酌み

またしてもタイミングのあわぬ妻の酌

ビール壺の露のままなる酌うれし

茶屋酒がだんだん旨い地位になり

二日酔いものに動ぜぬ姿なり

誘惑はおみきを入れてからのこと

健康法きけば盃もつ仕草

飲める身のケチな雪とはおもえども

彼は酔いマダムマダムを連呼する

酒仙とは良きかな一本提げてくる

お銚子をかえて今夜は帰さない

遣伝でんなアと盃の手がふるえ

ひとり酌めばいみじくもまた秋の雨

飲み友達飲むまでケチなことを言い

紅
灯
の
タ
ベ

・

半玉に男ざかりの手をひかれ

姐さんの苦勞すなおに舞妓きき

男はんの悪口舞妓もついで言い

腹違い舞妓になつているという

ワテが通りまつせという歩きぶり

鏡台へ西陽のきつい屋形にて

蜜柑の皮もおちよやん握らされ

スタンドの出物があつた妓の電話

狸寝と女将はとうに知っている

姐さんのほめる女将の社交ぶり

はしやいだあとの寂しさ妓にも

子持ち仲居もつたいないが口につき

芸者の耳うち高いものになり

月ヶ瀬、吉野、長谷、生駒仲居のスケジュール

スカンタコという声が大きい仲居部屋

首筋から風邪ひきそうに舞妓居る

ああは言つたが心で泣いたと言う女将

若旦那女将が出ると他愛なし

段梯子女将眉間で何か言い

最初からこられまつかと捻られる

三味ひける姑で孫をよせつけず

舞妓がつけた渾名で旦那さん嬉しがり

相場拳三つ指ついた妓と見えず

内幕を舞妓が話す派手なこと

四

季

元日や素直に鼻をふかすなり

辰年年頭所感

竜頭蛇尾となる一年の計を樹て

四十七になつても正月よろしおま

日曜のちよつと大きいおらが春

ポチ袋ませた御礼を言われたり

義理がたい人に元日起こされる

初電話向うもまわつているらしい

ポチ袋芝居好みを伯母は見せ

唯々諾々と爛（爛）の追加も三カ日

お祝儀という数の子のケチなかさ

三カ日明治生れは寝るとする

蠅叩き一匹たたいて返事する

昼寝から起きてマツチをふみつける

心中のそれもセル着る頃だつた

張板へ柿の若葉が柄となり

猿飛が現われそうな落葉焚く

応接間の金魚逆立ちしてくれる

御陵から御陵につづく彼岸花

鯉幟りの尻尾が天気変えるなり

打水の滴りに立つ妻揚枝

寂光院コスモスの道菊の路

暗がりに梅の香と知る始発駅

遮断機の向うに信貴の花曇り

ラツパ飲みの彼方に湧いた雲の峯

平家村つめたい水の湧くところ

白砂青松夏だけ停まる駅という

急行の停らぬ駅の良い桜

踏切の雪だけはいて火にあたり

老梅の孤独を愛す崖つぷち

ボロクソにこきおろしとこへ涼みに来

陽が落ちてから来た水着よく泳ぎ

蚯蚓も神さんもとなえて放尿草紅葉

あほくさとも言わず炬燵を猫は出る

路郎忌や美濃の大八備後の亜鈍

地藏盆山盛りという供えよう

洗濯の雫へコスモス真盛り

花屑をあつめてボート屋暮れ残り

昼の雨あがつた雀の騒ぎよう

王手飛車かけて夕立ほめるなり

花
び
ら
を
つ
つ
い
て
鶏
ま
た
歩
る
き

桜、藤、躑躅、と沿線あわただし

振り袖に似て金魚のUターン

督促状と一緒に入った花だより

夏休みの学校蟬の鳴くところ

懸崖へ猫の尾がある良い日和

夕立は土の匂いをかがすなり

大屋根で隣りの柿の熟れをほめ

夕桜スリはとつくに駅で待ち

蚊を払う仕草で舞台廻り出し

夕涼み一人となつて星を見る

初入選西陽気づかう位置にあり

貨車一つほつとかれてる霜の朝

田植の腰のばした途端汽車が行き

強がりへ雷だんだん近うなり

背泳へ入道雲は足の先

裸木の美 冬陽落ちんとす

横
町
の
雑
音

青い灯のホテル夜霧にいきをつき

蚊柱の崩れて検視五六人

靴磨き磨きたい靴前に行く

心配しましたで心配しましたでと義理の仲

二階借り名刺をちよつと下げて貼り

すし捨を出てポン引と肩並べ

牛肉屋のおつさん理事の名刺くれ

掃除婦と守衛の口の端に上り

鯨幕張り張り日本晴れをほめ

散髪屋で風呂屋で税金まだぼやき

刑事室刑事自ら炭をつぎ

成金の趣味は日の出の軸に見せ

万引の哀れ子供のものの許り

金策に出たままという記事となり

持つて死ねなんらしい銀行から櫛

税務署と言えはシヤツクリとまつたり

落第もまたたのしからずや座談会

ブラインド閉めたひととこ護送犯

後添いは十字架背負う座となりぬ

コンクール残念でしたが続くなり

殊勝げにダイヤモンドの掌を合わせ

妾宅で名士死んだと書いてなし

大臣に紐がついてる阿呆らしさ

まあまあ栄転の方だつしやろとは淋し

看板屋交通事故を俯瞰する

机へ脚のせてボーナスの話なり

家主夫婦同じ棟の端^{はし}に住み

のみこみを信じ代議士邸を辞す

この辺は虫が鳴いてた交差点

有難い弔辞額にも入れられず

最後まで読んでなんや広告か

告別式おくれて哀れモーニング

見送りの時間をきいて遂に来ず

成人式智能指数にかかわらず

嘘ついて寝た夜の天井低いこと

リベートはもうのんでしもうた阿呆らしさ

空巢よけのラジオと空巢知っており

死んでまで薨去卒去と段があり

取巻へ代議士という巾で下り

男

ご

こ

ろ

膝枕須磨の別荘売るという

籐椅子に猿又の紐ゆるう居る

南向いて出やはつただけは知っており

ハイドの気持ちで夜の街行く

妬いてるの？問われて男苦りきり

ベレー帽どうですという冠りよう

本氣にするぜと男の嬉しそう

そもそものは二階に居つた時分から

あたつてみたのか小町を悪く云い

針箱へ土産の鯨の折をのせ

身勝手な奴やと　ど気儘者が云い

剣幕の逆手とられている若さ

人が悪いわ養子さんだつかいな

もうゆずられる養子髭をつけ

俺の代俺の代を信じて養子老け

人間味がないと悪友評すなり

友遠方より来たるまた保険なり

借りに来た友とは妻にきかすまじ

腕を見込めば養子飲めるなり

七光りですと養子如才なし

養子会作る話もそれつきり

舅の失敗えらい源助やですみ

柄の提灯のと伯父が罷り出で

総辞職男をたてたつもりなり

女
ご
こ
ろ

女もう暴君でないが気に入らず

あの晩の風邪よと女嬉しそう

長襦袢せかされている足袋を穿き

市電代返えすにもめる女連れ

炬燵から女は櫛を拾うて出

朝の床ピンはパラパラ落ちるもの

ハンドバッグ迷える心パチつかせ

丸鬚が瘡症病みの首を立て

伊達巻の後ろ姿へ湖は暮れ

小指たてられる程御寮人きかしてい

よどみなくお悔み婦人部長言い

化粧なおす後姿へ喫う煙草

蛙一つで仰山に抱きつかれ

ヨヨと泣いておいて他人さんへ嫁ぎ

ここすえと唇の色罌粟の色

自信ある顔で三面鏡を閉じ

持ち味をいかす化粧の濃ゆからず

O・Kと派手に別れた戎橋

女店員うまくとぼけているのなり

マダムふと壁の銀狐の瞳と合いぬ

ハイヒール待たしてあります歩きよう

誘惑をせよと口紅アイシヤドー

チト低い鼻でサービスゆきとどき

すねてなんかいまへん欲求不満です

美容院から帰りあわてまいことか

待ち呆けさすには惜しい美人居る

お坊ちゃんねと女逆らわず

ネツクレス修験者程に巻きつける

コート着てからまた話しだす女客

誘惑にのりたしヒモが怖いなり

女連れ一人　はなれた器量よし

女連れよう肥えたのがボスらしい

女連れたけのこで行く打ち合わせ

知らん顔して毛糸編みつづけ

ゆうべ来たらしい吸殻捨てている

訴訟などおこして妾老けている

おだやかに話して御寮人良い度胸

シヨツプガール大阪辯が出てしまい

袖丈に娘時代をなつかしみ

剃刀沙汰の女が通る春の雨

良縁かどうか嫁く身がいつち知り

かき眉毛みみずくという顔になり

占いにわてもわてもと女連れ

二号と後妻貯める話に馬があい

独占したかつたとB・G穴をあけ

挨拶は指のダイヤを見のがさず

夢のような話に女ついてゆき

これが義務ですがなと女嬉しそう

恋

レジスタープロファイルだけの位置におり

恋人が中風筋とは面白し

それからの言葉手摺で待っている

恋人は刺客のようにより添うて

会うたのも中の島別れたのも中の島

愛人として角砂糖の数も知り

四十の或日の恋は落葉踏む

相聞歌さてさて七十三とかや

四十の恋は手形を割つて逢い

逃げ腰で四十の恋をしてるなり

暇と金　金と暇とが食い違い

折あらば隙あらばと中年のいやらしく

萬葉は綺麗に妬いているのなり

目くばせに哀れ五十の血があわて

手を洗うてるところへ来てささやかれ

ゴシツプは今日又かえたネツクレス

行末を小間使いの方が案じ

月の縁団扇くるくる廻すだけ

ボートも二人ベンチも二人中の島

情熱はいつそ無口にしてしまい

色の道メンデルの法則ここに生き

アバンチユール横町をぬけ路次をぬけ

手をつなぐきつかけとなつた水溜り

愛の巢は隣りの音もよくきこえ

雨傘を忘れて帰る術もござる

水差しを小笠原流で運ばれる

愛人はうなずくばかり砂の道

愛人の言葉のはしも暖かく

カステラと花束

お見舞へ附添い言葉添えるなり

病人の向うむいたをとがめまじ

寝返つて氷囊さぐる機嫌が出

七度二分見舞の客の好き嫌い

置き薬でなおつた風邪を笑ろて起き

退院へ爪先ゆるい足袋をはき

お見舞に行けば一杯やつており

お見舞は寿司が喰べたい話きき

寝顔だけのぞいて見舞失礼し

検温器はさんで主治医趣味のこと

春になつたらと病人も看護婦も

検温へちよつと眼蓋を開けただけ

退院の握手の力ほめられる

検温を汐時にした見舞客

食後すぐ薬の為の飯のよう

北
の
護
り

オーロラに煉瓦の街は哀しかり

馬上より指さす夏野ソ連領

夏草を鎧いて馬上ゆたかなり

姑娘の耳輪にふれる語らいや

空襲へ刺繍の靴は抱かれたり

鞭声嘯々掖河を渡る鉄兜

野糞放るや大満洲の春の風

最後の味方

若う言うてくれた人を妻おぼえてい

ワイシャツを着かえることで妻ともめ

そうでっしやないかと女房逆う気

遊走腎手術（明和病院にて）

病妻と別れる握手他人めき

手術二日女は化粧するとう

手を貸せば纏足めいた試歩の妻

最後の最後の味方は妻なりき

弱味を見せるなと妻の眼が合図

流し目も上目も出来ず妻は老け

植木市妻は咲いてる方を買ひ

老妻はゲタゲタ笑うだけのとりえ

倅ですともといじらしいことを云う

夜中まで待つて女房は叱られる

低血圧の妻の朝寝を咎めまじ

着せかけて帰りの時間きくは妻

酢昆布の匂いで妻にささやかれ

あつけない新幹線に妻不服

一
男
三
女

長男誕生

初産へ神棚しかと灯をともし

タテ、ヨコ、ヨコ、子供の居寝のたのもしし

内は役者が揃うています子沢山

子沢山蚊帳吊れば吊る騒ぎよう

感謝したりうるさがつたり子沢山

叱言もう解り子供ら母につく

洗濯を手伝う邪魔も女の子

ポケットから出るたのしみへ子は並び

どちらにも似ず赤ン坊猿に似て

愛の結晶もう言うことをきかず

四人目を抱いて器用に飯をつぎ

両端は両親で守る蚊帳の裾

這えば立て 立てば歩めのカメラ向け

赤ン坊湯気のまんま抱き上げる

長女、三女昭和四十年十月に男子出産

ヨーイドンと産ぶ声あげた孫二人

お砂糖のありかをかえる子沢山

ようきいときやと妹ついでに叱られる

つぎつぎに寝顔のぞいて俺の子だ

泣きやまぬ子へ倉の鍵がちやつかせ

油断がならぬとは倅のことであり

末っ子の団扇の風もたまに来る

子沢山どつちでもいける柄をより

医者 of 機嫌を損ねる程に親は訊き

おためは欲しいし犬は嫌だし

平均寿命四十年も残し娘逝く

次女の死

肉親の嗚咽の中の釘の音

盂蘭盆会幸うすき次女なりし

水
鷄
庵

鬼になりきれなかつた人生のたそがれる

八十五点という人生でありしよな

コツコツコツ出勤の猫背が硝子にうつる

水すましに暫し忘我の我でよし

牛の瞳に人間何をあわてとる

口八丁自分の恥もさらけ出し

リーダーともおつちよこちよいとも言われ

社長の性談古典落語めき

社長とは金融に走るものなるか

右書左楽音痴の俺は如何せむ

虞や虞や汝を如何せん四十八

キーホルダーと名がかわつても親父もち

還暦が自分であつた面白さ

後手後手と廻る生活の五十年

小皺唧てば責任のある顔という

草月流俺の気性に似ておかし

命ある句命ある句とて寝てしまい

ポン引きの近よってくる髭かいな

優越感フト気がつけば一人なり

社長今日孤独の二字をかみしめる

跋

畏敬する、水鶏庵菜こと、西尾巖先生が、長年に亘る労作のなかから、佳吟を撰びだし、この度句集を、上梓されることは、私自身のことのように嬉しい。

先生が、短詩型文学における、数少ない、川柳という分野に、その精進の跡を示す記念塔をうちたてたことを心からお祝い申上げる。先生と私との出会いは、私が製菓時報に籍を置いたときであるが、爾来十有余年、先生は七宝製菓株式会社社長として、私の仕事に深い理解と、温かい友情をもち、且つ明治四十二年西歳生れの菓業人の集いである、『羽搏会』のメンバーとして、心の友として、私と深いつながりをもっている。

曾て製菓時報の紙上に、『風柳会』という川柳欄を設けたとき、私の要請

をいれて、選者となり、業界同好者の指導育成に尽力を下され、紙上に一段の光彩を添えていただいた。俳句をやっている私が、川柳に開眼したのもこの時であつた。

されば、このように先生と私とは誠に因縁浅からぬものがあり、先生独自の、ユニークな作風に接する機会が多く、俳句修業の上に慇なからぬ啓示を得たことは、私にとつて非常な「文福」であつた。

既に一家を成している、先生の作品については、柳門外の私が的を射た、鑑賞など、出来るわけではないが、柳俳一味を指向される、句境から、私は多分に俳句的なもの、俳味に通ずるものを感じている。その鋭い観察眼と達識、豊かで鮮度の高い表現力、人情の機微と世俗の消息を巧みに作品化される力量については、同根であるだけに、俳門の一老生にも十分わかるのである。

本句集の刊行は、柳壇の進運を担うものとして高く評価され、後進を裨益

することの大であることを深く信ずるものである。

水鶏庵の清泉に、柳影深く映じるところ、薰風渡りくる浄机のほとり、益々の御健吟と句境に円熟を加えられんことを切に祈る次第である。

昭和四十五年 若葉もゆる頃

祝吟 熾んなる陽や万緑を地に与え

株式会社 週刊製菓時報社編集長

松 田 暁 声

あ　と　が　き

或晩のこと、蜜柑の筋をとりとり、家内が言うに、『あんた、川柳やつて、来年で四十年になるて、言うたはつたから、記念に句集でも、出さばつたらどうでつか』と冗談とも、本気ともつかぬことを言うてくれた。それからフトその気になつて、最も敬慕している、麻生葭乃先生に、序文をおたのみしたところ、二つ返事でひきうけて下さつた。さあでで半分以上出来たものと、例によつて、仲気にかまえていたら、その気になつてから、一年がたちそうになつたので、あわてて編集にとりかかつた。

四十年前の句を拾うてゆくと、

恩師路郎先生に、初めて御指導を賜つた頃のことか思い出されて、こうしてかりにも句集という名のつくものを出せるのは、全く、先生のお蔭だと、本箱の上の、先生の胸像に掌を合せた。

明治四十二年三月六日に生まれた自分は、運よく戦争から生きて歸るし、四人の子供の父として、何かにつけて恵まれた家庭で、誠に運の良い方であつたが、職業運だけは悪かつた。

旧制の府立富田林中学校を卒業して、第一番に就職した、藤田銀行はバニツクでつぶ

れた。それから大阪大学の前身大阪帝国大学医学部の経理課に就職して、在職中結婚して、その縁で、橋本製館株式会社へ転職したが、間もなく応召した。終戦になつて歸つてみると、会社は戦災に遇うてしまつていた。（現在は橋本食糧工業株式会社）

そして、大日本帝国軍隊は、ものの見事に、つぶれてしまったのであつた。

自分のゆくとは、ようつぶれるなあとと思うと、之からは、もう人を頼まぬ、自分で、つぶれん会社を拵えなあかんと思うて、合資会社曙川食糧工業所という製粉会社を創つた。製粉、製麵、製パンは戦後の花形だつた。

然し何時までも花形はゆるされない。二転三転して現在の菓子製造にかわつた。

その間

ひがんできけば機械の音も借金借金

社長とは金融に走るものなるか

と吐句した。そして今度も亦つぶれるのではないかと心配した。

八尾の工場を閉めて、大阪の松屋町の近くで菓子問屋をしたこともある。その時

葉の花の中の工場は閉めてあり

と詠んで、八尾の地をはなれた。

然し序文にも、書いてもろうたように、自分が何時も朗らかに、機嫌の良い顔をして

いられるのも、川柳のお蔭で、路郎先生の厳しい中に、やさしい御人格にうたれて、『幸福は自分の手から』と言うことを知つたからである。

又柳界の先輩同僚は毒舌家(自分はその優たるものであるが、すばらしい心の温かい人達許りで、苦勞なしに交遊出来るからであると感謝している。立春とは言え、今日も庭の池には氷が張っている。然し自分の心は、吹くよ春風袂も軽るくという気持である。

句の選別は、葭乃先生にお願いしたが、自分には忘れたい句は挿入した。何から何まで、葭乃先生に御厄介になつたことを、衷心より厚く厚く御礼申上げる。

又運の良い自分は、川柳塔社中島生々庵主幹の過分の序文も戴いた。立派な序文を二つももらつて、些か序文負けする句集とは相成つた。深謝申上げる。

次に畏友、週刊製菓時報社の松田曉声編集長が、跋を書いて、大太鼓をたたいてくれたのには驚いた、謝々。

尚、新仮名使いにかえるについて、不二田一三夫氏に御厄介になつた。有難う。最後に、藤原童心社の社長のクリスチャンらしい御尽力に感謝申上げる。

昭和四十五年 春立つ日

水鶏庵にて

朶

識

著者 柳 歴

昭和 六年 阪大川柳会入会

昭和 十二年 不朽洞会会員

昭和 三十一年 不朽洞会理事長

昭和 四十年 川柳塔常任理事

昭和四十五年七月一日 印刷
昭和四十五年七月七日 発行
(第五回路郎忌)

句集『水鶏笛』 非売品

八尾市八尾木八一七

著作兼
発行人 西尾 栞

〒 542 大阪市南区鰻谷仲之町二〇

発行所 川柳塔社

電話 大阪二七一―三九八五
振替口座 大阪三―三三六八番

吹田市天道町六番十五号

印刷所 藤原童心社
電話三八八―二三七七



